

令和8年
4月28日

病害虫発生予報 5月号

茨城県病害虫防除所

水田・レンコン田に農薬を使用した後は止水期間を守り、
成分の流出防止や防除効果の確保に努めましょう。

< 目次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦：赤かび病	1
ナシ：黒星病	1
ナシ：ナシヒメシンクイ（越冬世代～第一世代）	2
促成・半促成ピーマン：うどんこ病	2
夏ネギ：べと病、ネギアザミウマ	3
○施設野菜の栽培終了後の管理について	4

【その他の病害虫】

水稻、促成・半促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ、夏ネギ	4
○サツマイモ基腐病の防除対策	5

II. 今月の気象予報 6

(巻末資料) 病害虫発生予報の見方について

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、茨城県病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200
ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。
<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou/>



※ 病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせください。

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

小麦

1. 赤かび病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想されている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 小麦における防除適期は、開花始期～開花期（出穂期7～10日後頃）である。地域によって生育にばらつきがあるため、圃場ごとに出穂状況を確認して適期に防除を実施する。
- ② 赤かび病菌の子のう胞子の飛散好適条件は、「日最低気温10℃以上、日最高気温15℃以上の条件を満たし、降雨日またはその翌日」である。飛散好適条件が続く場合は、1回目の薬剤散布の7～10日後に2回目の散布を行う。
- ③ 薬剤を選定する際は、収穫前日数や使用回数に十分注意する。また、2回以上散布する際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤を用いる。

(令和8年4月10日発表 病害虫速報No.2 参照)

ナシ

1. 黒星病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月中旬現在、発病花そう率（本年値0.13%、平年値0.13%）、発生地点率（本年値10%、平年値16%）ともに平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 花そう基部病斑（芽基部病斑）は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第花そうごと除去し、園外に持ち出して適切に処分する。
- ② 落葉上の子のう胞子は4～5月に降雨があるたびに飛散し、葉や果実に感染するので注意する。
- ③ 薬剤防除は、生育ステージをよく観察し、気象情報に注意して適期に確実に実施する。
- ④ 薬剤は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

(ナシ 続き)

2. ナシヒメシンクイ (越冬世代～第一世代)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月中旬現在、フェロモントラップへの越冬世代成虫の誘殺数は、土浦市、笠間市、小美玉市で平年より多く、筑西市(下館地区)でやや多く、筑西市(関城地区)で平年並～やや多く、かすみがうら市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 交信かく乱剤を使用する場合は、第一世代以降の成虫を対象に5月中旬までに設置する。
- ② 薬剤散布の際は、10a当たり300リットルを目安に丁寧に散布する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

促成・半促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い (促成ピーマン)	鹿行地域
	平年並 (半促成ピーマン)	

[予報の根拠]

- ① 4月中旬現在、促成ピーマンにおける発病度[※](本年値16.5、平年値2.2)は平年より高く、発生地点率(本年値75%、平年値36%)はやや高い。
- ② 4月中旬現在、半促成ピーマンにおける発病度[※](本年値0.3、平年値1.4)、発生地点率(本年値25%、平年値15%)ともに平年並である。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

夏ネギ

1. べと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月中旬現在、発病度^{*}（本年値0.3、平年値0.4）は平年並～やや高く、発生地点率（本年値25%、平年値10%）は平年よりやや高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。
※発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用し丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 薬剤感受性の低下を防ぐため、FRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

2. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 4月中旬現在、被害度^{*}（本年値22.0、平年値10.8）、芯葉の被害株率（本年値71.5%、平年値33.9%）ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。
※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 気温の上昇に伴って増殖が速くなるので、発生圃場では速やかに防除を実施する。
- ② 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

施設野菜の栽培終了後の管理について

今作の促成トマト及び促成キュウリにおいて、微小害虫が媒介するウイルス病（トマト黄化葉巻病・黄化病、キュウリ退緑黄化病・黄化えそ病）の発生を認めています。

これら病害の発生が認められたハウスでは、病原ウイルスを保毒した微小害虫のハウス外への飛び出しや次作への持ち越しを防止するため、栽培終了後の管理を適切に行いましょう。

栽培終了後の株は、誘引したまま根を引き抜き、2週間程度ハウスを密閉し蒸し込みを行いましょう。また、薬剤処理による古株枯死を行うことも効果的です。

なお、蒸し込み等の処理終了後には、作物残渣をハウス外へ持ち出して適切に処分してください。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
水稲	イネミズゾウムシ	発生時期：平年並 発生量：－	4月中旬現在、本田での生息数が最高に達する時期は、平年並と予測される。
ピーマン 促成	斑点病	発生量：平年並	4月中旬現在、平年並の発生である。
	コナジラミ類	発生量：やや多い	4月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
ピーマン 半促成	ハダニ類	発生量：やや多い	4月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並	4月中旬現在、平年並の発生である。
トマト 促成	黄化病	発生量：平年並	4月中旬現在、平年並の発生である。発病株は直ちに抜き取り、適切に処分する。媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。
キュウリ 促成	黄化えそ病	発生量：やや多い	4月中旬現在、平年よりやや多い発生である。媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
	灰色かび病		4月中旬現在、平年よりやや多い発生である。
	アザミウマ類		
	ハダニ類		
夏ネギ	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	4月中旬現在、平年並の発生である。

サツマイモ基腐病の防除対策

【植付時のポイント】植付前に、苗は必ず消毒しましょう！

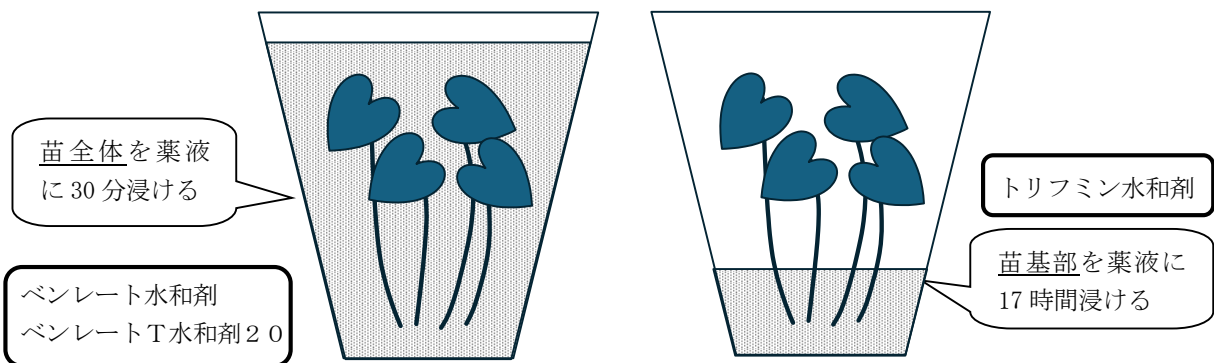
採苗時のポイント

- 採苗時のハサミは、丁寧な水洗とふき取りをこまめに行う。
- 苗は地際から5cm以上の位置で切る。
- 採苗した苗は、採苗後、速やかに消毒する。
- 苗消毒用の薬液は使用当日に調製し、登録の内容に従って浸漬処理を行う。
- 切苗を購入する時は、基腐病対策が徹底されていることを販売店に確認し、未消毒の場合は購入後に必ず苗消毒を行う。

安心安全な苗を植え
ましょう！

(令和8年4月1日現在)

薬剤名	使用時期・使用方法
ベンレート水和剤	植付前に30分間苗浸漬
ベンレートT水和剤20	
トリフミン水和剤	植付前に17時間苗基部浸漬



作業にあたっての注意

- 発生地域と行き来のあったコンテナ等は、洗浄してから使用し、残さや土を圃場に持ち込まない。
- 作業する圃場ごとに、農機具や長靴等についた土は良く落とし、水で良く洗浄する。※コンテナや農機具、長靴等の洗浄は、圃場の近くでは行わない。

記録しておく（侵入に備えて）

- 圃場ごとに、①植え付けた苗の苗床の場所、②採苗日、③ウイルスフリー苗の購入先を記録しておく。

圃場で基腐病が発生したら、
発生源を追跡！

II. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 4月25日から5月24日)

気象庁 (4月23日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
	気温	関東甲信全域	10	40	50
	降水量	関東甲信全域	30	30	40
	日照時間	関東甲信全域	40	40	20

[概要]

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が少ないでしょう。

<1週目の予報> 4月25日 (土曜日) から5月1日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<2週目の予報> 5月2日 (土曜日) から5月8日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率ともに40%

<3週目から4週目の予報> 5月9日 (土曜日) から5月22日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率60%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRACコード、IRACコード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。

病害虫発生予報の見方について

病害虫防除所では、向こう1か月の病害虫の発生を予測した病害虫発生予報を毎月下旬に発表しています。

予報の作成にあたっては、職員による圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果を過去のデータと比較し、病害虫防除員からの情報、各病害虫の発生生態や向こう1か月の気象予報等を考慮して検討しています。ここでは予報をよりよく理解していただくため、予報の見方について説明しますので参考にしてください。

【注意すべき病害虫】 向こう1か月の間に多発生が懸念され注意を要する病害虫や、例年その月に発生が問題となる病害虫について記載しています。

1. ハダニ類
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
やや早い	多い	県下全域

予報の対象地域

向こう1か月の予測を、「平年値」との対比により記載します。
平年より
「早い」(6日以上)
「やや早い」(3~5日)
「平年並」
「やや遅い」(3~5日)
「遅い」(6日以上) 等で表記します。
特定しない場合は、「-」で表記します。

向こう1か月の予測を、「平年値」との対比により記載します。
平年より
「多い」
「やや多い」
「平年並」
「やや少ない」
「少ない」 等で表記します。
特定しない場合は、「-」で表記します。

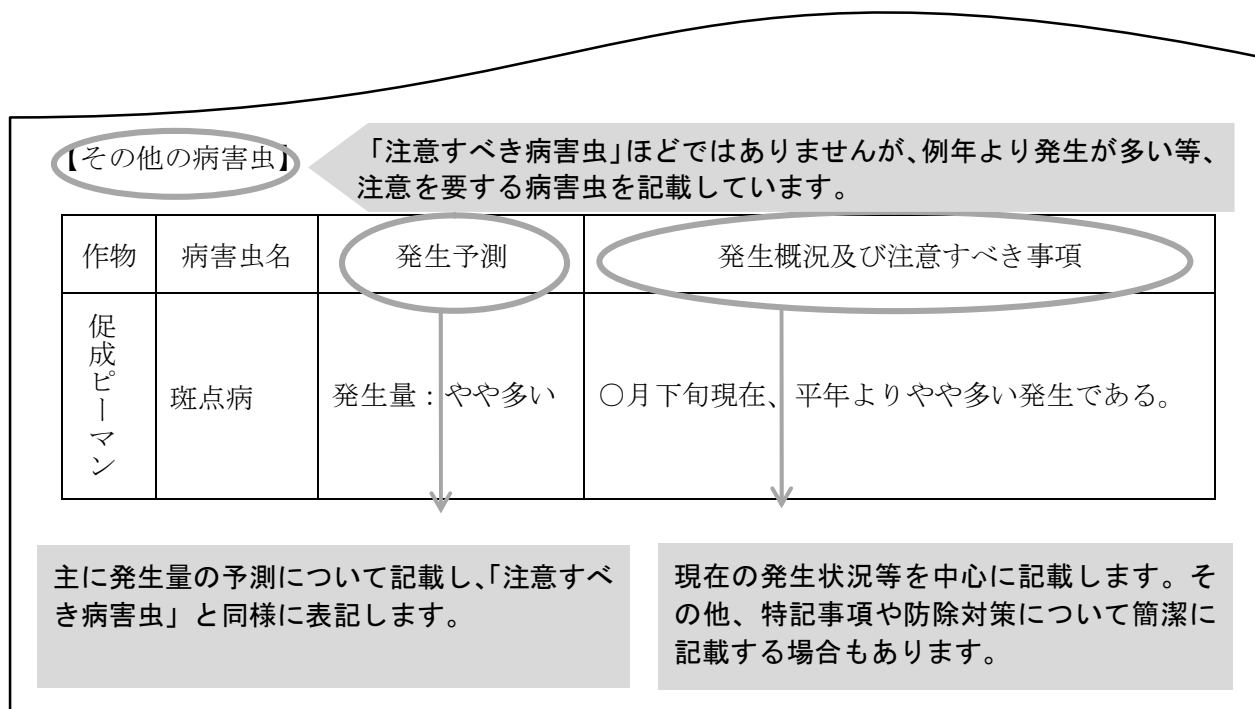
【予報の根拠】 予報内容の根拠を記載します。圃場巡回調査やフェロモントラップ調査等の結果に基づく現在の発生状況、予想される気象条件が対象病害虫に及ぼす影響等について記載しています。

- ① ○月下旬現在、被害葉率、発生地点率ともに平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想され、発生を助長する条件である。

【防除上注意すべき事項】 防除を行う際に、注意すべき事項等について簡潔に記載しています。

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ② 薬剤散布は、薬剤が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。

病害虫発生予報の見方について (続き)



予報等に記載される用語例

病害虫防除所が発表する予報等の病害虫に関する情報では、いくつか特徴的な用語を使用していますので、主に記載される用語について簡単に解説します。

・発病度、被害度

調査圃場における対象病害虫の発生状況を客観的に評価するため、調査株を被害程度別に区分・集計して数値化したものです。最小値は0で最大値は100となります。

・発生地点率

圃場巡回調査で、対象病害虫の発生や被害が見られた地点（圃場）の割合です。

・平年値

過去10年間の調査データの平均値です。調査を開始してから10年が経過していない場合は、○年平均値と示します。

・フェロモントラップ

主に性フェロモンを誘引源として対象害虫を誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。

・予察灯

夜間に電球を点灯し、光に集まる虫を毎日誘殺する装置です。害虫の発生状況を調査するために利用しています。